

2025年度

子どもの貧困対策事業報告書

特定非営利活動法人山科醍醐こどものひろば



山科醍醐こどものひろばのミッション

地域に住むすべての子どもたちが、心豊かに育つことをめざし、
地域の社会環境・文化環境がより良くなることを
大きな目的として、活動しています。

子どもと大人が一緒になってものごとに真剣に向き合うことで、
“ 共に育ちあいたい ”との願いを大切にして日々取り組んでいます。

あらゆる人にとって、自分らしく生きることのできる、
人との交わりを大切にします。

子どもの貧困対策事業とは

地域の子どもの豊かな育ちを応援する中で、集団で過ごすことが苦手だったり、学校に行くことができてないないという子どもや家庭の声から、2005年より個別サポート事業「楽習サポートのびのび」という活動がうまれました。
この活動を続けていく中で、経済的困窮を理由に体験活動への参加費が払えないなどの声も聞こえ始め、子どもたちの困ったを解決するための事業として2010年に「子どもの貧困対策事業」がスタートしました。現在では「暮らし・学習・余暇」という3つのサポート活動を軸に、一人ひとりの子どもの「やってみたい」に合わせた形で活動をしています。

もくじ

1　はじめに
2　2025年度のご報告
3　活動レポート「子どもたちと作ってきた1年間」
4　写真でみる「活動から生まれたもの」
5　活動レポート②「行き当たりばったりの中で、過ごすこと」
6　サポーターインタビュー「等身大の自分でいること」
7　おわりに

はじめに

私たち、山科醍醐こどものひろばの子どもの貧困対策事業に、温かいご支援をいただき、ありがとうございます。遅くなりましたが、2025年度の子どもの貧困対策事業の報告書をお届けいたします。事業としてこの1年間取り組んできたことの報告と、スタッフやサポーターが感じたこと、考えたことも含めた、現場の声を掲載しております。これまでの活動を振り返りながら、子どもの貧困対策事業の意味について考えていければと思います。

この1年も、子どもの声を聞きながら活動に取り組んできました。報告書の中では、子どもの「やってみたい」という声をひろって、それをどのように実現していくかということに焦点が多くあたっています。それらの活動を通して、子どもの新たな一面を知ったり、抱えている思いを知ったりします。時には、「しんどい」という声も聞こえてきます。昨年度の報告書でも書いておりますが、「ひろばがなかったら終わってた」という声があったように、子どもの声をしっかりとひろえる場所に誰かがいてくれる。それだけでも、この活動を続けていく意味があるのだと思います。

また、2月末に2週間の寄付キャンペーンに取り組み、皆様に寄付のお願いをさせていただきました。ご協力いただいたおかげで、何とか年度末を迎えることができました。ありがとうございます。
この寄付キャンペーンのチャレンジとして、公式noteの開設を行い、毎日広報発信をしてきました。その中で、スタッフが10年間寄り添ってきた子どもたちの活動についての言語化や理事やボランティアから見た、こどものひろばとはどのようなものかを書いた「ひろばと私」などを掲載しております。
これらの発信を通して、子どもの貧困対策事業について知っている方も、初めて事業を知っていただいた方にも、改めて山科醍醐こどものひろばが取り組む、子どもの貧困対策事業の意味について知っていただく機会になったかと思います。現在も定期的に発信を続けておりますので、まだお読みいただいていない方はぜひこの機会にご一読いただければ幸いです。

最後に、毎年お伝えしていることではありますが、子どもたちの置かれている環境は荒波のように不安定です。そのためゴールの見えづらい取り組みではありますが、これからも子どもたちに寄り添いながら活動を続けてまいります。引き続き、温かいご支援をよろしくお願いいたします。

特定非営利活動法人　山科醍醐こどものひろば
理事長　品田真孝

2025年度のご報告

みなさまのご支援・ご協力により1年間の活動が続けることができました。

1. 暮らしサポート

　平日の17時から21時に、あそび・夕食・入浴など、日常的な生活をサポーターと一緒に過ごす活動です。子どもの生活に合わせて日中に実施することもあります。年に数回の宿泊活動もあります。

　また拠点へ来られない不登校や引きこもりの子どもに対してはアウトリーチ活動として家庭訪問を行っています。



活動回数 **161** 回

のべ参加者人数 **415** 人

2. 学習サポート

　平日の120分、サポーターと一緒にマンツーマンで勉強する活動です。わからないところを一緒に考えたり、勉強方法を模索したりします。宿題や復習以外にも、息抜きにゲームをしておしゃべりする時間もあります。

　それぞれが勉強したいことを勉強しつつ、いろんな大人との出会いや、人との交流も大切にする活動です。



活動回数 **138** 回

のべ参加者人数 **464** 人

3. 余暇サポート

　土日を中心に、スポーツや体験活動、地域イベントに参加して休日を過ごす活動です。地域のいろんな人の力をお借りして、日々の生活や活動ではできないことにサポーターと一緒にチャレンジしています。普段よりもじっくり時間を過ごすことができるため、それまでできなかった話を深められたり、小さな願いを叶える機会になったりします。



活動回数 **21** 回

のべ参加者人数 **64** 人

4. 食材でのサポート

　地域のひとり親家庭から要望がある場合も提供を行っています。食品や日用品で家庭に必要なものを袋づめしお渡ししています。少しでも家族が食費を気にせずに食事ができたり、忙しい保護者さんや料理が苦手な子どもでも簡単に食べられるものを入れることで家事の負担が軽減されていればと思います。



合計配布数 **55** 回

ご支援・ご寄付

　2025年度もご支援、ご寄付をいただきありがとうございました。実際に玄関までお越しいただいて野菜をいただいたり、電話をいただいてご寄付いただいたり、みなさまのつながりを感じながら活動づくりができました。遠方であったり、仕事終わりで参加してくださるボランティアさんもいらっしゃったりと、みなさまの思いが1日1日の活動につながってます。



寄付金合計 **1,874,433** 円

ボランティアのべ参加合計 **439** 人

▼食材のご寄付





お菓子、お米、野菜、レトルトなどいただきました。

▼ウィッシュリストからのご寄付



マットやお米などいただきました。

▼本のご寄付

チャリボンを通じて古本からご寄付いただきました。

合計寄付金額 **81,992** 円

2025年活動レポート

子どもたちと一緒につくってきた1年間

私たちの日々の活動は、子どもたちの想いや気持ちを受け止めて、そこに私たちサポーターの想いも混ぜながら一緒につくっていくことを大切にしてきました。
そんな日々のダイジェストをこのページを使ってお届けできればと思っております。

ハロウィン

日々、子どもたちと関わっていると、全力で向き合うことの意義を感じる場面が何度かあります。2025年度、とある活動では、本気のハロウィンを実施しました。ハロウィンの数か月前から、「今ハロウィンが一番楽しみ！今年は何する？」と話していた子どもたち。どうしてそんなに楽しみなのかというと、いつもはサポーターに「やめて」と言われている肌や服へのペイントができたり、いつもよりたくさんお菓子がもらえるから。当日が近づいてくると、「飾りとか仮装のやつ用意しといてな？」「私グミが好きやから、お菓子に入れといて」「ハロウィンのお菓子作りたい」など子どもたちからも様々な要望が出てきました。



いよいよ迎えたハロウィン当日、料理チームと仮装チームに分かれて、それぞれがやりたいハロウィンを一緒にやりました。料理は、ウインナーとパスタを使ったミイラや、餃子の皮とのりを使ったおばけなどのハロウィンメニューを作りました。思ったより、手間がかかり苦戦しましたが、完成品をみてテンションが上がっていました。仮装チームは、被り物や血のりを用意してくれたサポーターがおり、子どもたちも「こうした方が、もっと怖く見えるんちゃう？」「俺がここから驚かすから、こっちに隠れといて」などとアドバイスをくれながら、盛り上げてくれました。料理にせよ、仮装にせよ、子どももサポーターもやりたいことを毎回全力でやってみることは大変です。でも、季節行事などの特別活動と一緒に、挑戦してみるのも大事だと思いました。



コラボと特別な体験と冒険

日常の中ではなかなか経験できないような体験を子どもたちに届けるため、法人内の別事業である「わんぱくクラブ」と連携し野外体験のプログラムに子どもたちと一緒に参加してきました。

夏の活動では、日差しが照りつける暑い日に冷たい川へ！大人もワクワクするような気持ちのいいきれいな浅瀬の川で水遊びをしたり、石の裏に隠れる生き物を探して川遊びを満喫しました。その後は竹を使った流しそうめん。「もっと流して！」と流れてくる麺を必死に追いかけてお腹いっぱいになるまで夏を満喫ました。

冬には、自分たちで火を育てることから挑戦する焼き芋づくりへ。この日はちょうど雪が降り、一面の銀世界の中で本気の雪合戦や雪だるまづくりを思う存分楽しみました。寒さを忘れて遊んだ後、自分で作ったほくほくの焼き芋は最高だったようで、余った分を大切に持って帰っていました。

こうした普段の生活の中ではなかなか味わえない経験や体験の機会は、子どもたちの大きな財産になると感じています。自分たちの挑戦が形になる喜びや、五感をいっぱいに使った遊びを通して、参加した子どもたちは終始とても楽しそうで、生き生きとした表情を見せてくれました。事業の枠を超えたこのコラボレーションだからこそ実現できた、非日常を味わう時間となりました。

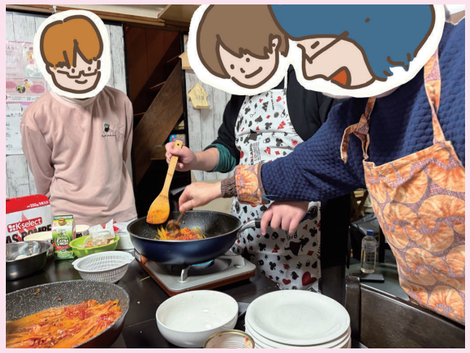


料理をしてみる

とある活動ではいつも軽食をボランティアさんに作ってもらって、お腹いっぱいにしてから、勉強を頑張ったり、それぞれ過ごしたい時間を過ごすというのがいつもの活動の流れとしてありました。その料理がほんとにいつもおいしくて、卒業生からは思い出の味として語られるほどでした。

年度の終わりごろに入って、「自分たちでもほんまにおいしい料理作ってみるのどう？」という話になり、料理企画が始まりました。YouTubeの動画でおいしそうなレシピを調べて、作れるイメージを膨らませて、実際に調理器具を手にしてみる。活動に参加している中学生にとっては料理という動きが新鮮で、包丁の握り方から、分量の測り方、どうしたら食材が料理になるか、すべて0からのスタートで、右も左もわからない中で調理を進めます。

この料理企画で一番印象に残っているのは「暗殺者のパスタ」を作ってみる回です。大人も作ったことのない料理で、またその場にいる誰もが食べたこともない料理で、正解がわからない中作ってみました。「ほんとにこれでいいのかな…」と不安ながらに出来上がった味は妙にくせになる味で、この料理企画が終わった何週間後かに「実は家でも作ってみた」と中学生から話してくれたことを覚えています。料理という特別ではない活動ですが、これも2025年度の大事な思い出です。



写真でみる
活動から生まれたもの

ここでは子どもたちが作ったものを「写真」でまとめてみました。1つ1つの写真に思い出があり、エピソードがあります。季節を感じるものもあれば、その時の思いつきで作ってみたものであったりと、それぞれに思い入れがあるものばかりです。ぜひご覧ください！



もらった大玉スイカで、
フルーツポンチ。スイカの器も
自分たちで作ったんやで！



耳にチーズを入れたり、
好きなだけ具材をのせたり、
アレンジは無限大！



和歌山出身のサポーターから
もらった厳選みかんで、
果汁100%ゼリー☆濃厚!!



生地から手作りピザ！



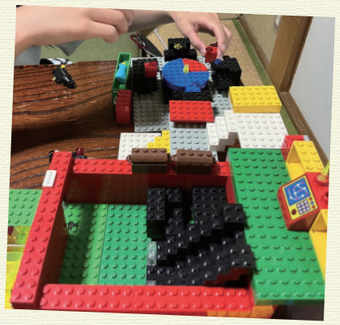
休みがちなその子も、「いちごの
誕生日ケーキ作ろう」と言うと来
てくれた！



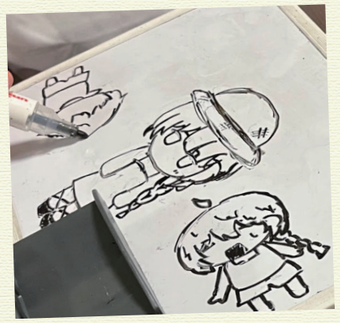
サンタのケーキ！
いちごと中のプリンが美味し
くて、ついついつまみ食い〜。



スライム気持ちい〜。
絵の具を混ぜたら、
何色になるんだろう?



レゴの世界。理想のおうちに、
超能力の使える世界などなど
…想像力豊か！



夏をテーマにお絵かき対決。
夏と言えば、キャミワンピに
麦わら帽子でしょ！



TikTokで見つけたお絵かき術。
テープを貼ったところはキレイ
な模様ができるねん！



一緒に酢飯づくり!!!



ピザ屋です☆照り焼きチキンと
マルゲリータお待ちどうさま。



もち米ついて、作ったお餅。
なんか、ふわふわで美味しい！

2025年活動レポート②

行き当たりばったりの中で、過ごすこと

子どもの貧困対策事業では、いつもの事務所を飛びだして、子どもたちと商業施設や公園に出かける余暇活動を実施しています。2025年度にも、キャンプやアイススケートなど、色々な体験をしましたが、なかでも特に印象的だったエピソードを紹介したいと思います。

9月のある日、ふと、参加者の子といつもより長い時間をつかって、楽しいことをしたいなと思いました。今まで活動場所で、ボードゲームをしたり、YouTubeを見たりしながら過ごしており、どちらかと言えばインドア派の子だったため、どういう形で実施するのが良いか悩みました。

普段の活動もそうですが、私たちは子どものやりたい気持ちやみんなで活動を作ることを大事にしています。ということで、まずはその子に聞いてみるところから始めました。いつもの活動場所でボードゲームやお菓子作りをして過ごすのも良し、外に出かけて普段はできないような体験をするも良しと提案してみると、せっかくなら出かけたいと言ってくれました。外出に肯定的だったことに驚きと嬉しさを感じつつ、どこに行くか、何をするかなどの相談を進めていきました。最終、「電車に乗ること」と「コメダ珈琲に行くこと」を一番の目的に、いつもの活動とは違う体験を一緒に楽しむこと、そして本人の気持ちを聞きながら過ごせれば…と思いながら当日を迎えました。

当日は、朝からお出かけ日和で、久しぶりに会うサポーターとも一緒に良いスタートを切ることができました。まず、コメダ珈琲で腹ごしらえをするところから始まります。実は、コーヒーが飲めることが分かったり、メニューを決めるのに優柔不断だったり、今まで知らなかった一面を見ることもできました。割とボリューミーな卵サンドに苦しみながらも、「食べ切りたい」と奮闘している姿が印象的でした。

お腹も満たされたところで、いよいよ叡山電車に乗りに行きました。ただ乗るだけでなく、謎解きをしながら行こうということになり、ハンドブックを片手に出発しました。謎が解けた時のハッとした表情や目的の電車に乗るためにダッシュして電車に乗ったことなど、思い出深い出来事は色々ありました。しかし、思ったより謎解きが難しく、歩き回る必要があったため、途中で終了し、ただ電車に乗ることを楽しむことにしました。こういった枠にとらわれず、行き当たりばったりで気ままに過ごすことができるのも、余暇活動の魅力だと私は思っています。

最終的には、八瀬の方まで行って、自然を感じたり、色々な種類の叡電車両を見たりして、一日を過ごしていたのですが、その中で、特に私が一番印象に残った出来事を紹介します。八瀬比叡山口駅に到着した後、川沿いを上って、ケーブル八瀬駅まで行きました。少し休憩して、鞍馬線の方に乗りに行こうと言っていたのですが、何度か声をかけても、その子は動こうとしませんでした。最初は疲れてるのかな？と思っていましたが、だんだん何か意思があるのではないか、と思い始めました。ただ、自分からその気持ちを言ってくれるわけではないので、どうしたものかと悩みました。

ふと、一緒に行っていたサポーターが「ケーブルカー乗る？」と提案すると、それまで反応が薄かったその子が大きくうなずいてくれました。ということで、急こう配を叡山ケーブルに乗って進み、京都市街が見渡せるケーブル比叡駅まで、やってきました。車窓や頂上から景色を眺め、傾斜のついた車両にガタゴト揺られるその子の表情は満足げで、こちらもより嬉しい気持ちになりました。最初に願っていた一緒に楽しむ、本人の気持ちを聞く、という目的も達成し、本人が自分の気持ちを出せる場、気持ちを共有できる場になったことが、この日の一番の喜びであり、余暇活動の意義を感じた出来事でもありました。

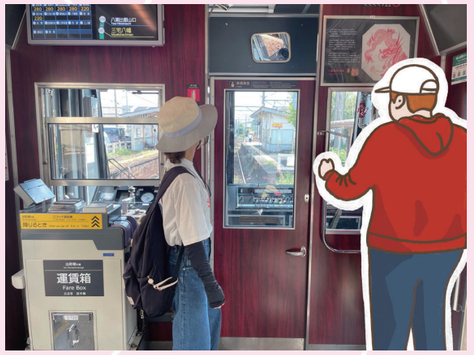
このように、家族以外の人と出かけ、普段の活動とは違った過ごし方をすることは、子どもにとっても、大人にとっても、様々な影響を与えるものだと感じました。今回は、その子の新たな好きや苦手、楽しみ方の幅をたくさん発見したり、余暇活動で考えるべきポイントを実感したりすることができました。

今回に限らず、別の活動でも、余暇という時間に余裕を持った活動を設定することで、参加者の話をじっくり聞くことができることもあります。また、学校ではできないような体験を実施することで、子どものやりたい、楽しい気持ちを引き出すこともできたりします。だからこそ、いつもの活動はもちろんですが、こういった余暇活動も大事にしていきたいものです。これからも、困りを減らし、日常を送るためのエネルギーを蓄える普段の活動に対し、充実を増やし、これからの選択肢を広げられるような余暇活動を作っていきたいと思っています。









サポーターインタビュー

等身大の自分でいること

その年、その時々で、子どもも大人も変わります。参加している人が変わることもありますが、参加している日によって気分や調子が変わったり、参加している年で学年や迎えている状況が変わり、参加している年数で関係性や思い出の数が変わります。ここではサポーターのインタビューを通して、活動に参加している人たちのリアルをお届けできればと思います。

ぶっちゃけ最初は…

最初は、ぶっちゃけると就活を直前に控えていて、大学生活で打ち込んだことが多くなかったので、何かしら打ち込めるようなボランティアを探していたのがきっかけです。最初は中身も知らない状態ですし、参加した理由としては就活準備の義務感から参加しました。

実際に子どもたちとふれあったり、サポーターの方とコミュニケーションを取ったりして、人とのつながりに心地よさを感じていつのまにか活動を続けていた、というのが振り返ってみればあります。活動を振り返る、「ふりかえり会」でも「こういうふうに振る舞ってほしい」みたいなことは他のサポーターさんからは言われなくて、自分で考えて工夫したり、他の方の子どもとの関わり方を参考にしてみたり、それに子どもたちが応えてくれる。その過程がすごく心地よくて参加し続けた理由になっているのかなと思います。周りの方が自分なりの考えを持って楽しそうに試行錯誤していて、自分も同じ熱量で関わりたいと思いました。

活動に通ううちに義務感や課題感が薄れて、誤解のある表現かもしれませんが、息抜きみたいな側面が出てきました。日常のやらないといけないことや考えないといけないことから離れて、等身大の自分が出せる場所だったと思います。

子どもと対等に

一番大切にしてきたことは、「子どもと対等に」ということです。最初は予想できない行動に見えても、同じ人間でちゃんと人格がある。家庭環境や学校での友人関係など、その子なりの事情があるんだと知りました。そういったところを無視して、「問題行動を起こした」みたいな捉え方を、自分自身は今までしてきたような気がしていて…。活動を通して子どもの視点を改めて再認識して、「ひとりの人間なんだ」という見方に変わった気がします。自分の方が年齢的に上だから、言うことや指示を聞いてもらって当たり前、という感覚は持っちゃ駄目だと思っています。

無理やり大人の意見に従わせたり、「これが正しい」と押し付けたりすることをできるだけしない。してしまったなら、ちゃんとフォローして、「ごめん、今のなしで」「逆にどうしたい？」と後から聞く。そのあたりは強く意識していました。自分にも、立場が上の人から一方的に意見を押し付けられた経験があって、大人と子どもという立場で並ぶときに、そういう関係性の？構造の再生産をしたくないなと思ったんです。





好きなものを好きなだけ

印象に残っているのは、みかんの回です。「好きなものを、好きなだけ食べる経験をしてほしい」という思いから、子どもたちにみかんを持っていきました。和歌山県民として、自分の県のいいものを一回、経験として食べてみてほしいという気持ちもありました。僕は京都にいたので、家族に直売所へ行ってもらって、電話で連絡を取り合い、見た目や実際に食べた感想を聞きながら、二種類を選びました。活動の時間に届くようにして、みんなで分け合って感想を言いながら食べたんです。

「いくらでも食べてもいいよ」と言って、ずっと食べていたり、袋ぱんぱんに持って帰ったり。その姿を見られてうれしかったです。物を持っていくのは、お土産というだけでなく、普段お世話になっているからという気持ちもあります。サポーターさんと同じくらい子どもたちにもお世話になっていて、関わることで気が晴れたり、生き方の参考になることもいっぱいありました。



活動への願い

一方的に怒られたり、話を聞いてもらえなかった経験から、大人に失望していることもっていると思います。だからこそ、ここに行けば頼れる大人、話を聞いてくれる大人というのがいたり、もしくは無理に大人と関わらなくても、自分らしく過ごすことができる場所が大切だと感じてます。ひろばの活動の中では、身近な大人が機嫌よく隣にいてくれることが、すごく大きいなと思っていています。

子どもたちには、いろいろな制約で選べなかったこともあると思うので、自分のしたいことや、なりたい自分を自己決定できて、実際に実現できるように願っています。何より楽しく生きてほしいですね。今、子どもたちに声を掛けるとしたら、あえて「頑張って」とは言わずに、本当に「楽しんで」と言いたいです。

おわりに

　みなさんは2025年の1年、どんな年だったか覚えていますか？報告書の作成にあたって写真を見返していると、「あぁ、こんな日もあったな」、「あ、この時にこんなことしてたんや」と少し前のことにも関わらず、ちょっぴり懐かしく当時の記憶が蘇ってきます。もちろん楽しくて印象に残っている活動もあれば、「この時だいぶ踏ん張ったな…」とその時子どもが直面していた大変さを思い出す活動もありました。当時のその瞬間は、子どもも大人も将来がどうなるのか見通せず、活動を卒業したその後はほんとに大丈夫なのか、両者とも心配や不安になっていたりしたものですが、たくさんの人の力をお借りして、その時々を生き抜いてきたなと振り返って感じます。喉元過ぎれば熱さを忘れるというわけではなく、そしてまた子どもたちと紡いできた活動のすべてが最善だったかはわかりませんが、その後子どもたちの声から思い出話として出てきたり、当時いたサポーターは今元気にしているのかなと思いを馳せたり、またこれからどうしよっかと一緒に悩めたりするのは、過ごした時間の積み重ねがあったからこそだとも思います。

　卒業生から「あー、中学生の頃に戻りたいわ」という言葉は、当時が充実していた嬉しい言葉であり、でももっと今に心満たされる時間になってほしいと願いたくなる言葉でもあります。一方で、「はやく大人になりたいわ」と今来ている子どもたちから聞く言葉はもどかしい言葉で、人生の中で14歳という年は誰しも1度しか来なくて、受験があるからといって我慢の年であったり、つまらなかった1年にはなってほしくない、どの年も今年が一番いいなと言える年になってほしいと思ってしまいます。とはいえそう思っていても、目の前の子どものためにと思って準備や企画をして、「これやる意味あるん？」、「これの何が楽しいん？」と問われた時はどきっとします。よかれと思ったことが必ずしも喜びや成長、困りごとの解決につながるとは限らず、むしろそれらを期待してしまった時こそ、子どもの気持ちや思いを聞けてなかったのでは、大人の焦りと心配を押し付けてはなかったかと、活動ごとに振り返っていました。

　1年が終わったからといって、また年度が変わったからといって、取り巻く生きづらさや生活の大変さがリセットされるわけではありません。無事に卒業できたから、新しい進路を掴み取れたからそれで終わりではなく、紆余曲折があって、時に振り出しに戻ってしまったのではないかと、それまでの積み重ねはなんだったんだと頭を抱えるという状況もあります。それでもそれぞれの人生は続いていて、うまくいっていても、うまくいかなくても、変わらずに一人の人として関わってくれるつながりや場所が必要だと年々感じるようになってきました。2025年度が無事に終えられたかどうかは、もっと先の未来にならないとわからないのかもしれないですが、子どもたちの生活は今もなお続いていて、これまでの活動、今の活動が、少しでも思い出や生きていく糧になってほしいなと願っています。

子どもの貧困対策事業担当
三宅正太



発行　2026年11月
特定非営利活動法人山科醍醐こどものひろば

〒607-8072
京都市山科区音羽伊勢宿町33番地77
Tel　075-591-0877
Mail　kodohiro@gmail.com

応援お願いします！